

書評「飯舘村からの挑戦 ―自然との共生を目指して―」

Book Review: "Exploratory Challenges from Iitate -Toward the Society in Harmony with Nature-"

杉野 弘明 Hiroaki SUGINO

本書の著書である田尾陽一氏は東日本大震災と福島第一原子力発電所の事故からの 10 年を、彼と仲間達(飯舘村の住人やふくしま再生の会とその応援者)の活動からの視点で振り返り、時系列的な復興の断面図として本書に描き示している。本書の構成は、第一章に現在飯舘村に暮らす著者の日常生活が描かれ、その後第二章から時を遡り、事故直後における飯舘村での活動の始まりや、ふくしま再生の会の創設経緯(第三章)、当会の初期活動の試行錯誤(第四章)、各取り組みの柱(第五章)、日本各地や世界と飯舘村を繋ぐ試み(第六章)、そして著者の近年の活動であるアートによる村おこしの試みや、農村と都会の交流事業の紹介(第七章)と繋がっていく。本書は論文ではないが各所にふくしま再生の会の活動で得られたデータや研究の内容が紹介されており、また飯舘村民との対話の内容、そして村や国の 10 年の動きに合わせた活動の発展やその事例の紹介が行われており、ふくしま再生の会が掲げる「民・官・学」の理念が本書内容にも反映されている。飯舘村だけでなく、福島を始め被災した地域には無数の復興の個人史が紡がれてきたはずである。その記録の一つとして、本書に描かれた飯舘村における 10 年の復興の断面図が持つ資料的価値は計り知れない。そして何よりも、著者と生き活きとした多くの登場人物達が紡ぐストーリーは、現代版南総里見八犬伝のように小気味よく、時に生々しく描かれる焦燥感にハラハラし、時に将来に向けたカタルシスが訪れて心地よい。しかし、終章まで読み終わった際、新型コロナウイルスを始め現代社会における諸課題へと著者の思考が繋がった折には、本書の内容が実話であり、読者の住む「今ここ」に繋がっていることを強く感じる作りとなっている。今後も飯舘村を始め各被災地における挑戦は続いていくはずである。飯舘村やふくしま再生の会の試行錯誤と挑戦に新しく加わりたいと思う人にとっては、これまでの 10 年とこれからの活動に連続性を見出すことに資する良書であることは言うまでもないが、そのような人に限らず広く多くの人々に飯舘村、福島、被災地に自身の存在を少しでも引き付けるための第一歩としてお勧めしたい。

復興農学会誌 Journal of Reconstruction Agriculture and Sciences

第 1 巻 第 1 号 2021 年 1 月より